

実力向上講座

(漢字仮名交じりの書)

【第二回】漢字仮名交じりの書の歴史

山梨大学准教授 清水 文博

◇はじめに

今回は漢字仮名交じりの書の歴史の概略を確かめます。漢字と女手、尾上柴舟の調和体、戦後の展開の三つに着目してその歴史を駆け足で巡りたいと思います。

■漢字と女手

日本に漢字が伝来し、漢字を用いて日本の言葉を記しているものとして確かめられるのは五世紀ごろの遺品からであり、稻荷山古墳出土の鉄剣の銘文などが知られています。その後、漢字の音訓を借りて主に一字一音で記す仮名は『万葉集』で使用されました。漢字を崩さずに使用したこの仮名は万葉仮名（男手）と呼ばれました。平安時代には万葉仮名を草書で崩して書くようになり、簡略化されました。そこか

らさらに簡略化された仮名を女手と呼びます。

当時の女手は本誌競書で取り扱っている「高野切第三種」「関戸古今集」などに見ることができます。今日、我々が日常的に使用している平仮名も女手に含まれます。

漢字のみを用いて書く思考と女手によるもの、それらが混在したものを書く思考は必ずと異なってきます。女手の成立と拡大は、書の表現はもとより、今日に至るまでの私たちの思考にも影響を与え続けているといえそうです。

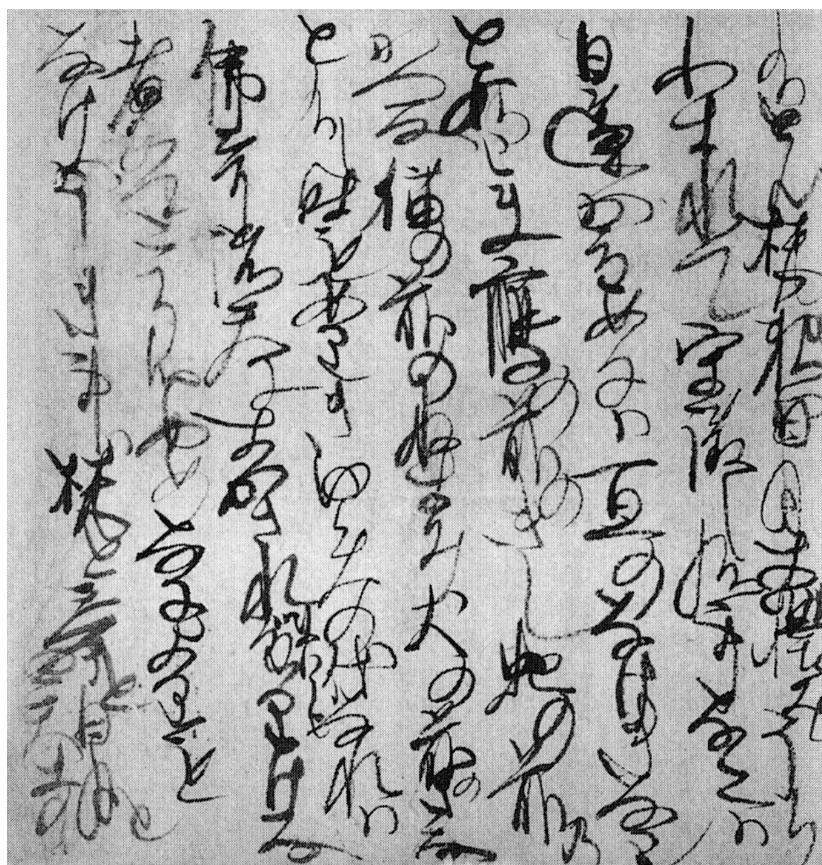
■尾上柴舟の調和体

明治になり、それまでの社会のあり方や価値観は著しく変化しました。明治十三年（一八八〇）に来日した楊守敬（注2）は、日本に多くの碑帖（注3）をもたらしたといわれます。その後の日本書道の動きについて、ごく単純化

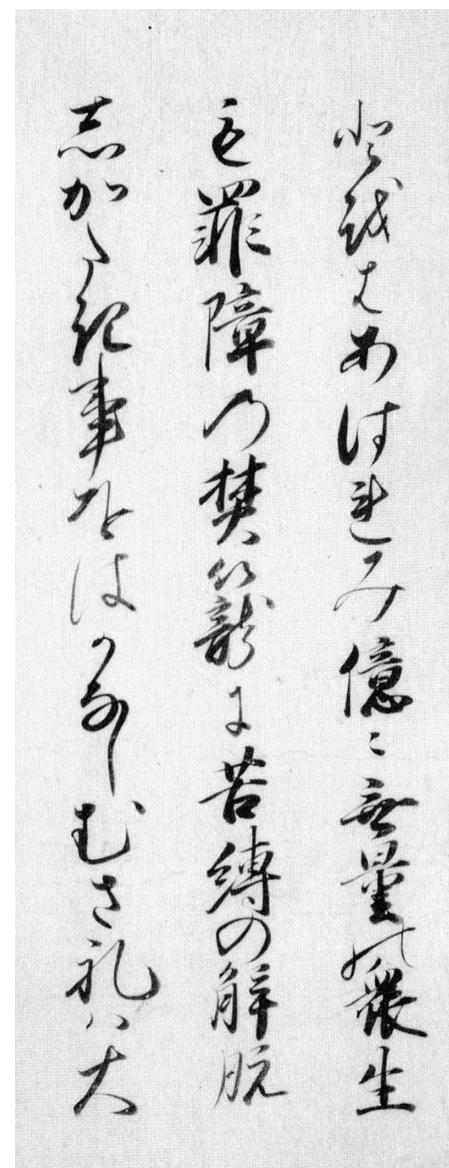
されたものです。【図2】は日蓮の書ですが、熱

情や力強さが感じられます。今日、学書の対象にされているか否か、読めるかどうかということは必ずしも関係ありません。読者各位の感性で漢字仮名交じりの書の参考資料を渉猟してみてはいかがでしょうか（注1）。

（注1）本稿では女手に着目しているが、万葉仮名（男手）と調和したものや片仮名と調和した名蹟に着目することもありうる。



【図2】神国王御書



【図1】慕帰絵詞

ぶという学書法に変化して、書の藝術性を追求する動きが活発化したといえます。この流れを受けて、大正期から昭和初期には、書道がブームとなりました。

このとき仮名書道の最高指導者として活躍したのが、書家で歌人、国文学者としても知られる尾上柴舟です。尾上は「粘葉本和漢朗詠集」等の仮名と漢字を調和させて詩歌や日常文を書く、調和体【図3】を提唱しました（次頁）。

文検習字科という当時の中等学校習字科の教員になるための試験においてこのようなスタイルで書くことが求められたことが、さらに調和体の広がりを後押ししました。文検によって調和体は「競う」という今日につながる書の特質の一つを後ろ盾として拡大したのです。仮名の完成を示す「高野切」時代の文字を用いた調和体の提唱には一定の説得力があります。一方、成立期の純粹な形への復古への着目が、近代の口語文を中心とした文章表現に適合したものであったのかという見方もできます。

(注2) 中国の清末から中華民国の初めにかけての学者。

(注3) 拓本を帖（冊子）に仕立てたもの。仕立てられていないものを含んで使用される場合もある。

■戦後の展開

戦後、これに異を唱える動きが活発化します。

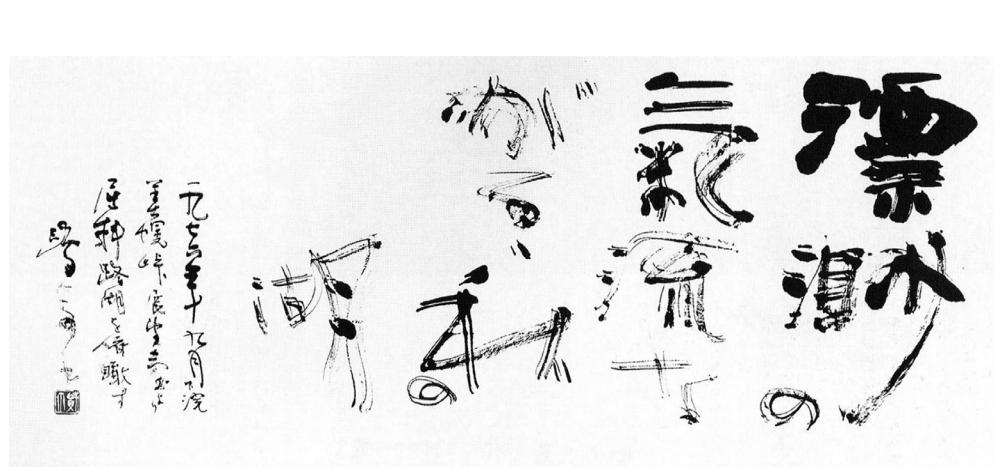
この中心となつたのが書家の金子鷗亭です。金子は漢字作品の書風に近づけること等により新たな表現の可能性を提示しました【図4】。金子は戦前から「新調和体」という用語を用いながら、現代文を書くのにふさわしい漢字仮名交じりの書の理論構築を行つていきました。この主張が「近代詩文書」として展開され、大きな盛り上がりを見せたのです。また、昭和三十年には日展第五科（書）に「調和体」部門が設けられました。書家による漢字仮名交じりの書が隆盛を見せる一方、このころまでは前号で紹介した高村光太郎などの書を能くする文化人や文筆

家が健在であり、優れた漢字仮名交じりの書を遺しています。

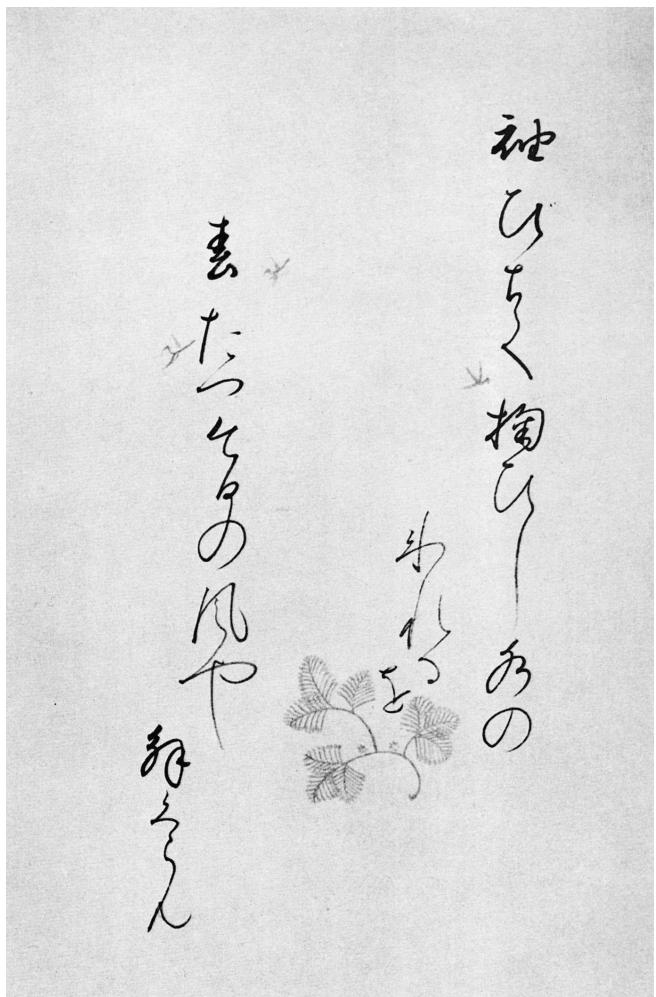
教育制度としては、平成元年版の学習指導要領の高等学校芸術科書道に漢字仮名交じりの書が採用されるようになって、教育現場における純粹なる書の創作活動に好適なものとして漢字仮名交じりの書が学ばれ続けています。

■おわりに

近世以前の漢字仮名交じり文の古典については、女手の発達や漢字との調和に着目しながら、既成概念にとらわれずに見てみましょう。昭和

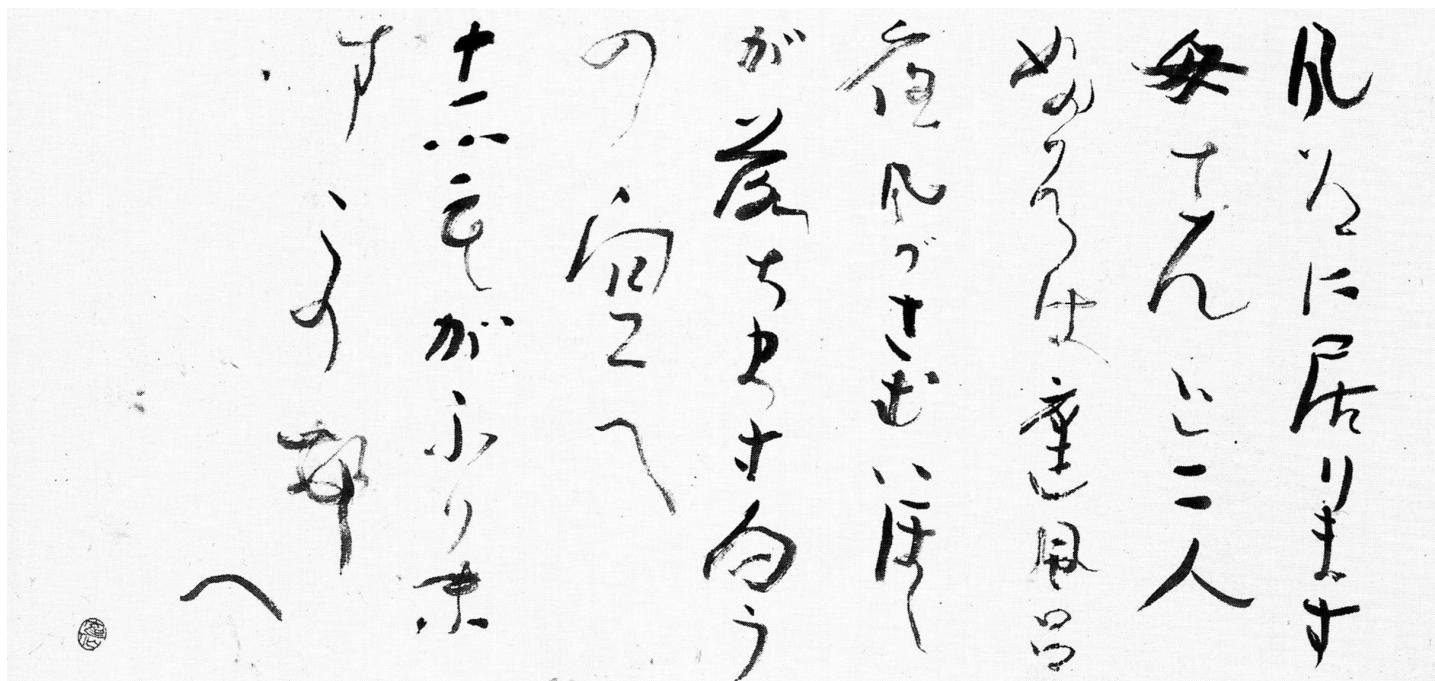


【図4】漂渺の氣流



【図3】青柳帖

初期、尾上柴舟が提唱した調和体は、古名蹟の芸術性を生かした「調和」であり、漢字仮名交じりの書の先駆的なものでした。この考えは戦後著しく発展して現代に至ります。成立と発展の要因は、漢詩漢文や和歌の教養の低下は勿論、筆の実用性の低下と芸術表現としての価値の創



【図5】風呂に居ります

風呂に居ります
母さんと二人
ふろは庭風呂
夜風かさむい ほし
が落ちます 向う
の空へ
しもがふりま

す この邨へ

最后に今回も漢字仮名交じりの書を鑑賞してみたいと思います。【図5】は、書家、津金雀せんの書です。糸文を掲載していますので、内容を含めた芸術性を鑑賞しましょう。漢字と仮名は一体のものとして運筆されており、暢達した運筆が特に連綿部分や伸びやかに書かれた平仮名部分から読み取れます。最終部の散らしの要素や余白に余韻を感じる方は多いのではないかでしょう。

歴史的に見ていくと、漢字仮名交じりの書のキーワードは、尾上柴舟が用いた「調和」であるということは確かです。特に学書ということでは、「漢字と仮名の調和」が第一の視点となるでしょう。現代性という用語を軽々に使うのは憚られますが、今生きている形を現代性を有した書として表出したいのは多くの表現者の願うところでしょう。また、歴史的に見て優れた漢字仮名交じりの書の制作者の多くは、書についてよく語っています。漢字の書や仮名の書は勿論、日常的に使用される語句内容とともにあら漢字仮名交じりの書について、日常的に「語る」ということを大切にしていただければと思います。



最後に今回も漢字仮名交じりの書を鑑賞してみたいと思います。【図5】は、書家、津金雀せんの書です。糸文を掲載していますので、内容を含めた芸術性を鑑賞しましょう。漢字と仮名は一体のものとして運筆されており、暢達した運筆が特に連綿部分や伸びやかに書かれた平仮名部分から読み取れます。最終部の散らしの要素や余白に余韻を感じる方は多いのではないかでしょう。